時間のメディアと形式
——ニクラス・ルーマンのコミュニケーション・メディア論から考える社会的時間——

日本学術振興会／京都大学大学院文学研究科　梅村麦生

1　目的

本報告では,「システムと環境の分化が時間性を産出する」(Luhmann 1973: 83=1986: 108）や「時間とは観察者による構築物である」(Luhmann 1990: 114）とした, ニクラス・ルーマンの社会システム理論によるシステム相対的で観察者依存的な時間理論を取り上げ, そこからコミュニケーション・メディアとしての時間という考えについて検討する.

2　内容

ルーマンは時間について, 意味というメディアの一つの次元であり, “以前と以後”という基本的な区別によって構成され, さらに近代的な時間概念のもとではそれが“過去と未来”の区別によって構成される, と規定していた. またルーマンは, 組織研究から摂取した“時間圧力”(Luhmann 1968）や, 法やリスクの領域に応用している“時間拘束”(Luhmann 1991=2014）といった概念, また“構造と過程”の区別などを社会システムの時間性に関わる契機として扱っている. さらに, ピティリム・A・ソローキンらに代表される機能主義的な社会的時間の理論と同様に, 全体社会の拡大と諸領域への分化が世界時間の標準化や抽象化をもたらす一方で, 各システムの分出がそれぞれのシステムに固有の時間性をもたらすとも説いていた. さらにルーマンの時間理論には、“作動時間と観察時間”という二つの時間性も指摘されている (Nassehi 2010).

しかしルーマンは、そうした多層的な時間の諸概念全体に連関と見通しを与える理論までは提起していない. そこで本報告では,「時間というメディアにおける形式獲得」(Luhmann 1990: 116）というルーマンの記述を出発点として, 後期ルーマンの“メディアと形式”の区別に基づくメディア理論と, 時間と同様に全体社会と各機能システムにおいて共通して用いられ, しかし社会システムごとに異なったカップリングがなされていると考えられる言語や文字を初めとする“伝播メディア”に関する議論を参照し, 時間をコミュニケーション・メディアとして扱い, さらに時間の“メディアと形式”を区別したうえで、メディア基体として社会に遍く存在する時間が個別の社会システムのもとで別様に形式化されていると捉える可能性を提示する.

文献

Luhmann, Niklas, 1968, ?Die Knappheit der Zeit und die Vordringlichkeit des Befristeten?, in: *Die Verwaltung: Zeitschrift f?r Verwaltungswissenschaft*, 1: 3-30.

————, 1973, ?Weltzeit und Systemgeschichte?, in: Peter Christian Ludz (Hg.), *Soziologie und Sozialgeschichte*, Opladen: Westdeutscher Verlag, 81-115.（＝ 1986，土方昭訳「世界時間とシステム史」『社会システムと時間論：社会学的啓蒙』ニクラス・ルーマン論文集 3，新泉社，103-169.）

——, 1990, ?Gleichzeitigkeit und Synchronisation?, in: *Soziologische Aufkl?rung*, Bd.5, Opladen: Westdeutscher Verlag, 95-130.

——, 1991, *Soziologie des Risikos*, Berlin: Walter de Gruyter.（＝ 2014，小松丈晃訳『リスクの社会学』新泉社.）

Nassehi, Armin, 2010, ?Tempus fugit? ‘Zeit’ als differenzloser Begriff in Luhmanns Theorie sozialer Systeme?, in: Helga Gripp-Hagelstange (Hg.), *Niklas Luhmanns Denken: interdisziplin?re Einfl?sse und Wirkungen*, Konstanz: Universit?t Verlag Konstanz, 23-52.